



ポインセチア

# 町内会短信 12月号

2022年12月1日 川沿中央第一町内会長 金山征晴

師走

今年最後のお便りとなりました。コロナはなかなか収束には向かいそうにありません。そんななかサッカーワールドカップが始まり、日本がドイツに勝ったと連日喜びの報道が飛び交っていました。ちょっとはしゃぎすぎではと思いましたが、残念ながらコスタリカには負けてしまいました。ハードルがまた高くなってしまいました。このお便りが届く頃には結果が出ていると思いますが、決勝トーナメントになんとか進出してもらいたいと思います。

11月・12月の活動報告及び活動予定については下記の通りです。

## 10月の町内会活動報告

11月2日(水) **どんぐり公園清掃**

11月6日(日) **連町輪投げ大会** (地区センター多目的ホール)

11月9日(水) **町内会資源回収**

11月16日(水) **どんぐり公園清掃** 今年のどんぐり公園清掃は終了しました。

皆様のご協力に感謝します。来年もよろしくお願ひします。

## 12月の町内会活動予定

12月2日(金) **街路灯組合補助申請打合せ**

12月3日(土) **クリスマス会** (藻岩児童会館体育館)13:30 ※町内会&児童会館合同の会です。

12月4日(日) **役員会**

12月11日(日) **事業検討委員会**

12月14日(水) **町内会資源回収**

## 郷土史より(視野を広げて) 松浦武四郎と北海道 (3)

郷土歴史家 吉田邦行



切実な願ひも聞き入れられないと判断した武四郎は、1859年 御雇を辞任し、著作活動に入った。蝦夷地紹介を目的とした前記日誌の摘訳本「蝦夷紀行」24巻をはじめ数多くの著作を刊行している。それは蝦夷地アイヌの人々のことを、広く庶民に伝えようとする取り組みであった。人々を引き付けるため生きた体験談、多色刷りの挿絵が多く挿入されている。そして各地の旅の記録を紀行文に仕立てた。これらの出版物は江戸や京都、大阪で人気を博した。

新政府が誕生すると1868年(明治元年)東京府附属職員、次いで1869年6月、誰よりも蝦夷地に詳しい適任者として蝦夷開拓御用掛に任用され、最初の仕事は地名の選定

であった。武四郎は、基本的にアイヌの人々が使っていた地名を活用することにした。蝦夷地を改めて北海道と称し、全道を11国86郡に分けた時、国郡名の選定に携わった。このとき札幌という小さな地名は、札幌郡という大地名に採用された。武四郎は「北海道の名付け親」と言われるが、わが「札幌の名付け親」とも言える。

また、札幌本府建設の基礎となったのは、武四郎の「蝦夷日誌」に記載された次の文言である。「文化年間に近藤繁蔵が対雁(ついでに)・江別に本府を置くことを説いていたが、自分が春の雪解けや秋の暴風の中にもしばしば往来した結果、対雁は適当の地でないことを思い、その付近を更に調査したところ、対雁川を三里上がった札幌・樋平(豊平)の辺りが本府建設の場所として最も適当の地であるかと考えられたので、対雁や札幌のアイヌの酋長にも再三質(た)して、十分の確信を得たから上申する」との武四郎の綿密な調査が決め手となり、ここに札幌本府建設を見たのである。1869年8月、新政府より開拓判官任命との声がかかった時、今までの様なアイヌの人々からの搾取する統治体制の廃止を要求し、それを条件に開拓判官に就任した。だが、武四郎の求めていなかったアイヌの人々からの搾取はなし崩しに続いていた。新政府に失望した武四郎は、わずか9ヶ月で役人を辞任した。それ以降も武四郎は日本各地を歩き回った。しかし、北海道の地を二度と踏むことはなかった。それはアイヌの人々の悲惨な姿を見たくないのと、自分の力量が及ばなかった失望の地に足が向かなかったのである。武四郎の近い友人に書いた手紙には、「松前藩と商人たちは開拓長官に賄賂を贈って、自分の悪口を言っていてどうにもならなくなった」と心情を吐露している。(次号につづく)

## コラム

### 【川沿の小窓から ⑦】 川沿中央第一町内会 相談役 柴田田鶴子

実母が83歳で亡くなる5年前、京都の紅葉を死ぬ前にもう一度見たいということで、母と二人、京都東山の高台寺(※1)の紅葉を見に行った。当時の京都は観光地ではあったが、今より人も少なく、緋毛氈が敷かれたお座敷に座り、伝小堀遠州(※2)作庭の池泉回遊式庭園を眼前にして、寺人が点ててくれたお抹茶を頂いた。今夏入院したりして、私も年を重ね、これが最後の京都旅行と思いを定め、義妹と二人再び東山高台寺の紅葉を訪れた。悪いことに go to キャンペーン中で、コロナものかわ、京都は人、人、人の波、お目当ての高台寺も今年から夜はライトアップ。おまけに若者向けの「光と虹のグラデーション投影」とかで、庭園のワビ・サビの風情はどこかに吹き飛んで、人の波に押しされ押しされ、いつの間にかお寺の外へ。今時の若者が望む物と外国人が望むキョートとのギャップに、純粋年寄り日本人としては、スゴスゴ引き下がるばかり。古き良き日本は紅葉の感じ方すら遠くなりにはけりです。小堀遠州先生も泉下でお嘆きでは? ……

“旅疲れ 芭蕉の偉大さ 今更に” (わずか2泊3日の旅ながら)

※1 高台寺 関白秀吉の未亡人ねねが晩年暮らした寺。家康もねねを厚く庇護したという。

※2 小堀遠州 安土桃山時代の大名にして名作家として有名。京都には彼の作庭した名園が数多くある。